一般の部　【最優秀賞】

「思いやりの奇跡」

学校法人昌賢学園群馬医療福祉大学　3年
長岡（ながおか） 咲歩（さきほ）

祖父が救急車で運ばれた。祖父はこの時八十五歳。普段から体力に自信のある祖父には病気で入院するなど予想もできないことであった。医師からは、高齢と臓器の機能低下のため最小限の治療しか行えないのだと伝えられた。そして、覚悟が必要だと。私は不安と心配と悲しい気持ちでいっぱいになった。

私は祖父の生き方が好きだった。自由で気ままで前向きで、猫が好きだ。祖父の習慣は太陽に手を合わせることで、親戚全員が健康で幸せにいられるようにと祈ってくれているのだという。入院してしまってからはその習慣はなくなった。私は太陽を見上げる度にそのことを思い出し、悲しみに耐える日々であった。入院中、祖父は毎日家に帰りたいと話していた。自分は元気だから大丈夫なのだとしきりに訴える祖父であったが、検査のデータからはとても家に帰れる状況でないことがはっきり分かっていた。入院して一ヶ月程経ち、祖父は何となく認知機能が落ちた気がする。よく熱を出すようになり、食事もまともに摂れなくなってきていた。家族は治療よりも本人の望む生活をさせようと決めたそうだ。医師は退院は無理だと言ったが、同じく家族は無理を言った。必死の訴えの結果、なんとか退院させてもらえることになり、翌週祖父は自宅に戻ることができた。安定しない体調と初めての自宅療養に不安と戸惑いでいっぱいの中、支えてくれたのは地域の医師、ケアマネージャーや訪問看護師の方だった。医療職の方の見守りがあるという認識は心強く、これらのサポートと家族の懸命な介護により祖父の体調は悪化することなく経過した。認知機能も入院前と同様までに回復することができ、歩行のリハビリも順調に進んでいる。周囲のサポートのおかげで祖父は願いを叶えることが出来たのだ。今後も祖父は、この場所で望んだ生活を送っていくことができるだろう。

私はこのことを経験して家族の思いやりを強く感じた。そして、この思いやりが不可能を可能にするほどの奇跡をおこしたのだと。また太陽の下を歩けていること、介護ベッドの上に飼い猫が共に寝転んでいること。当たり前の幸せが戻ってきたことに感謝してもしきれない。そして、先日祖父は八十六歳の誕生日を自宅で迎えることができた。医師に必死に頼み込んでくれた母、療養環境を整えてくれた父、毎日食べやすい食事を作ってくれる祖母、そして常に支えてくれている親戚のみんな、祖父と私たち全員の願いを叶えてくれてありがとう。私はもう一つ、このことをきっかけに思ったことがある。それは、願いを叶える手伝いができる職業に憧れたことだ。私は現在看護学生である。いつかは今回サポートしてくれたような看護師を目指して、誰かの役に立てるようになりたい。この恩を忘れずに、目標に向かって生きていこうと思う。